

Nara Women's University

I.幼・小・中等教育学校 連携研究の概要

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学附属幼稚園 幼年教育研究会 公開日: 2010-07-06 キーワード (Ja): 思考能力, 事物認識, 独創的, 粘り強さ, 表現形成 キーワード (En): 作成者: 奈良女子大学附属幼稚園幼年教育研究会 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/1661

I. 幼・小・中等 連携研究の概要



<モノ>とじっくりかかわる中で

「ねばり強く」思考する力を育てる

—幼・小・中等 15年間を見通して—

I. 幼・小・中等教育学校 連携研究の概要

本紀要の後半で示す教育課程は、文部科学省より研究開発学校の指定を受けた、以下の研究を基礎として発展させ、あらたに編成したものである。ここに、幼・小・中等教育学校連携研究の概要を示しておく。

1. 研究開発の課題

(1) 研究開発課題

幼・小・中等 15 年間にわたり、事物認識とその表現形成の徹底化を通して、独創的で「ねばり強い」思考能力を育成する教育課程の開発

(2) 研究開発の委嘱期間

平成 18 年 4 月 1 日～平成 20 年 3 月 31 日までの 3 か年間

2. 研究のねらいと仮説

本研究開発は、幼・小・中等 15 年間にわたる研究として、奈良女子大学附属幼稚園、奈良女子大学附属小学校、奈良女子大学附属中等教育学校の奈良女子大学附属三校園合同による取り組みである。三校園の概要を示す。

奈良女子大学附属幼稚園

1912 年創立。3 歳児から 5 歳児まで、いずれも 2 クラス、計 6 クラス規模である。めざす子ども像を「生き生きとした明るい子ども」「考えてやりぬこうとする子ども」「美しく温かい心の子ども」として、幼児が主体的に身近な環境と関わり、豊かな感性で自らの課題を解決していこうとする子どもを育てる保育を伝統としている。2005 年度は国立教育政策研究所より指定を受け、「全国のかつ総合的な学力調査」を実施した。

奈良女子大学附属小学校

1911 年創立。各学年 2 クラス、計 12 クラス規模である。「開拓、創造の精神を育てる」「真実追求の態度を強める」「友愛、協同の実践を進める」を教育目標とする。木下竹次の精神を受け継ぎ、重松鷹泰により提唱された「しごと」「けいこ」「なかよし」を教育構造とする「奈良の学習法」を伝統的に実践し、その実践と成果は全国的に高い評価を受けている。

奈良女子大学附属中等教育学校

1911 年に創立された奈良女子大学文学部附属中学校・同高等学校が 2000 年に法令に基づき中等教育学校として改組された。各学年 3 クラスで計 18 クラス規模である。「自由・自主・自立」を校是とし、社会、世界に開かれた学校を目指す。研究開発学校については過去 3 回の単独指定を受けており、特に「中高一貫教育カリキュラム」「総合的な学習」において、先進的な提案を行ってきた。現在は本研究開発とともにスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定も受けて研究活動を行っている。

(1) 研究のねらい

本研究の目的は、子どもの「独創的で『ねばり強い』思考能力」を育むべく、幼稚園3歳児から中等教育6年生までの15年間を通して事物認識とその表現の発達を促すための、〈モノ〉と〈コト〉の質感や構造の探究に向けたコアとなる活動を新たなカリキュラムとして編成することにある。

(2) 研究仮説

本研究における仮説として次の4点をあげる。

- ①創造的でねばり強い思考能力は、言語など表現媒体の運用能力だけでなく、探索能力、観察能力、そして表現能力に基づく。
- ②これらの能力は、周囲の世界と徹底的に関わり合う、「探る－観る－表す」というひとまとまりの活動において相互連関的に育成される。
- ③これらの能力は、眼の前の〈モノ〉に対する活動から、時間的空間的広がりや構造を有する〈コト〉に対する活動へと向かう発達の拡張によって高められる。
- ④独創性は、環境に対する子どもなりの能動的で徹底的な探究活動から豊かな個別経験を得ることと、その経験を他者と共有しあうことによって育成される。

3. 研究課題

(1) 教育課程の内容等

1) 新領域カリキュラムの編成 (図1参照)

「独創的で『ねばり強い』思考能力」のベースは子どもの「主体的な活動」に存すると考え、幼・小・中等15年間をつらぬく基本コンセプトとして「自由選択」と「体験」を設定し、これに基づきカリキュラム編成を行う。活動のキーワードとして、「探る－観る－表す」を掲げ、幼稚園3歳児から中等6年生までの15年間のうち、前半期は、「もの好き」(現前の事物への好奇心と感性的体験の育成)と、「もの発見」(事物の探究対象化と事物間の関連づけ)活動を導入する。また、「もの好き」から「もの発見」へは子どもの育ちに応じた緩やかで柔軟な移行を試みる。後半期については、「もの好き」「もの発見」の深化発展活動である「もの探究」(「もの探検」「もの語り」「もの作り」)に柔軟に移行し、さらに「デキゴト論究」(「デキゴト(現象)探索」「デキゴト(現象)観察」「デキゴト(現象)報告」)を導入していく。現前の出来事や日常的な出来事に対する「探る－観る－表す」活動から、自然現象や歴史的現象など時間的空間的広がりや構造を有する出来事や現象に対する「探る－観る－表す」活動へと拡張し、深化させていく。

◎カリキュラム編成上の留意点

本年度は、開発していく新領域カリキュラムを、事物認識発達位相に基づき、それぞれの位相におけるコアになる活動、教育実践化の視点を提示するとともに、具体的展開を「実践事例」の記述で表すことを目指していく。また、前年度まで、独立させていた「学びの協同性のための取り組み」もカリキュラム表に連結融合させていくことを図る。

本開発カリキュラムは新設、新領域と考えられるものにあたる。この点に配慮し、既存カリキュラムとの関係にも引き続き留意していきたい。小学校・中等教育学校については、教科を、「事物探索領域」「論理表現領域」「創造領域」の観点から見直し、新設活動との相互関係を検討し、有機的結合のあり方を明らかにする。具体的には、事物探究活動に対し、教科での学習は基礎的な認識とその技法を提供する点で貢献する。事物探究活動は、教科に対し、実証的な思考の仕方や、持続的に課題に取り組む態度を導入し、自分なりのテーマをより専門的見地から学ぶために教科学習の問題に転化させて取り組めるようにする。

幼稚園については、「環境」領域を中心とする5領域の見直しを通して、幼児の知的好奇心を活かした学びへの展開を促進し、幼小間の学びの接続に向けた活動構成を行う。とりわけ「環境」領域を中心に領域内の内容範囲の適切化や細分化、発達に応じた編成を検討し、幼児の遊び経験における試行錯誤的問題解決から学びへの接続を可能にすることを図る。

また、本カリキュラムにおける子どもの「評価」方法も検討し、カリキュラム表に記載していくことを目指す。

2) 学びの協同性育成のための取り組み

◎校種間連携活動「はてな?の広場」の導入

本研究では、子どもの独創性を育む要素として、「学びの協同性」を仮説としてあげている。事物探究活動は、子どもなりの自主的な取り組みを尊重しながらも、学びの転化と深化に向かうには、協同的な活動を必要とすると考えからである。そこで本研究では、通常の活動に加え、他者との相互作用を種々の機会ややり方で試みる活動を導入していく。

具体的には、幼-小、小-中等、幼-中等の校種間連携活動としての「はてな?の広場」を設置し、生活を異にする他校種異学年の子ども同士が、自他の生活圏で〈モノ〉や〈コト〉を介した学びあい教えあいの交流を行うことにより、別の視点から事物の可能性を再発見し、事物認識を深め、新たな表現の形成を促すことをめざす。

■ かがくのひろば

中等教育学校サイエンス研究会のメンバーが幼稚園児や小学校の生徒に対して、かがくの面白さや不思議さを紹介し、体験に導く活動。子ども達は興味深く活動に取り組み、異校種・異年齢交流ならではのおどろきとあこがれを引き出す。

■ おたずねひろば

本年度は小学校5年生の自由研究発表会に中等2年生が参加し、議論にも加わる取り組みを行った。小学校児童は中等教育学校生徒の研究の深まりや視点の鋭さ、発表技術の多彩さに、中等教育学校の生徒は小学生のてらいのない素朴な疑問とその発露、追究の姿勢にと、お互い大いに刺激をうける取り組みとなっている。

■ なかよしひろば

幼稚園と小学校は隣接している地の利を生かした交流活動を機会をとらえて行っている。

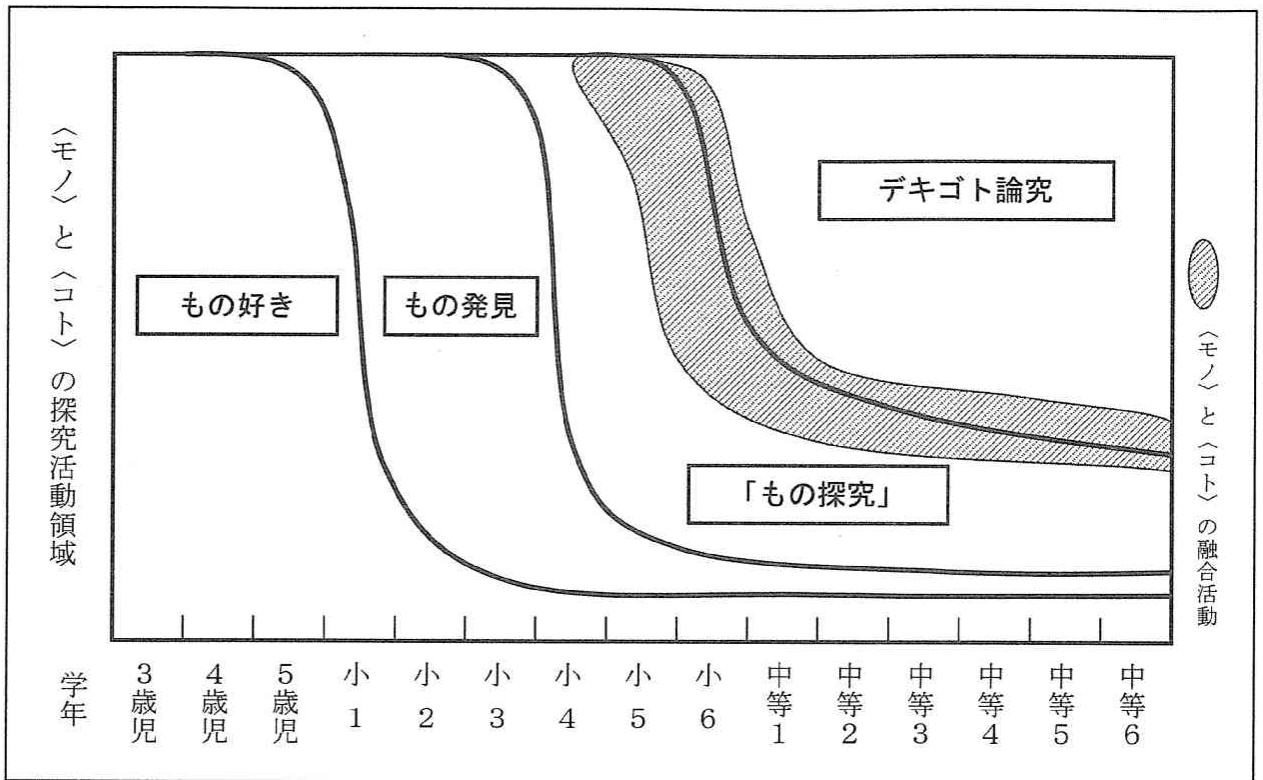


図1 事物認識発達位相をふまえた探究活動領域の展開

◎異学年合同活動

上記の校種間連携活動に加え、同校種内異学年・異年齢活動を導入する。「はてな？の広場」は異校種間の個人や小集団単位の交流活動であるのに対し、異学年合同活動は、通常の授業や活動のスタイルは保ちつつ、集団編成を組み替えて実施する活動であり、活動目的は参加者間で共通である。異学年合同にすることにより、発表や討論など集団でのコミュニケーション能力を高め、事物認識の深まりと共に、学び方を学ぶことを目指す。

幼稚園…「なかよしクラブ」・「なかよしひろば」 小学校…「低学年集会」・「高学年集会」
中等教育学校…「学園祭」「SSHサイエンス研究会」

◎おたずねと対話の形成

表現活動の一環として、集団での言語的コミュニケーションの形成を目指す。附属小学校では、就学移行期より、聞き手として「おたずね」という主体的反応表現を促進する指導を行っている。「おたずね」は、発表を媒介に集団で対話を形成し、その対話から学びを深化させる糸口を形成する。本研究では、話し合いの成立を単純に目指すのではなく、学びの深化につながる対話形成のあり方を追究する。

(2) 教育課程開発を支援する取り組み

1) 素材／学習材開発

従来から活用されている校内・園内の遊具や用具、各種素材のほか、これまであまり検討してこな

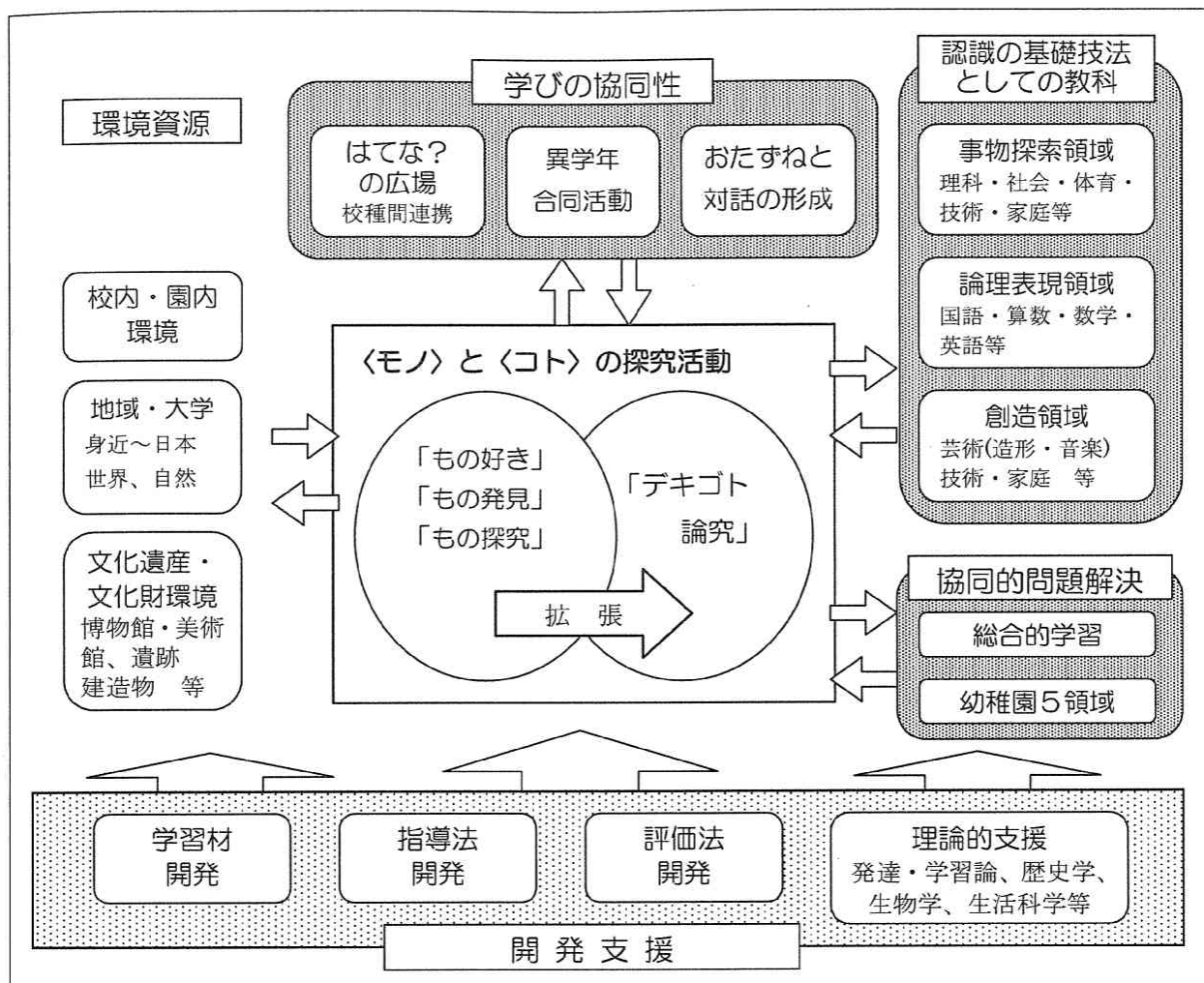


図2 事物認識とその表現形成に関わる教育課程開発の全体図

かった自然環境や人工的物質的環境の素材資源を見直し利用可能にする。また、新たに利用可能な素材を校園に持ち込むなど、資源開発を行う。こうした素材や学習材の開発によって、積極的な内容構成や環境構成を行う。

2) 指導法開発

子どもの自主的で独創的な活動を引き出すための指導の方法、適時性、適切性を研究していく。

3) 評価法開発

子どもの事物探究活動について、子どもの短期的～長期的発達の見点からの評価と、学びや経験の質の評価に関する方法を中心に、評価法の開発を行う。

◎現時点までに開発、実施した調査

- 「15年間の育ちを見通す」…附属幼稚園から附属小学校を経て中等教育学校に現在在学している子ども達の、幼稚園時代の遊びや興味の記録、小学校時代に取り組んだ自由研究のテーマを分析し、現在の様子についてインタビューを行う取り組み。
- 事物にかかわる認識調査…共通素材をもちいた〈モノ〉に対する関わり方の研究。小学校における「朝の会」での事物報告の学年進行による変化の検討

■ 「学習スタイルアンケート」の開発と実施…中等教育学校における質問紙調査

*子どもの「ねばり強い学習スタイル」の有無、程度について。附属小学校出身生徒と他小学校出身生徒との比較。本校と他校との比較など

(3) その他…研究を進めるにあたって

奈良女子大学の教育システム研究開発センター及び文学部・理学部・生活環境学部・人間文化研究科等との連携により、事物探究活動の教育的発達の側面や、保育・学習環境資源の開発、素材・学習材開発などの点において、学術的理論的支援を受ける。いずれも積極的な研修として実施すると共に、必要に応じて子どもへの教育活動への関わりについても協力を得る。

4. 研究計画

(1) 研究計画

<p>第一年次</p>	<ul style="list-style-type: none"> (1) 新領域カリキュラムの編成の試行 (2) 各教科、総合的学習の時間、幼稚園5領域との有機的相互関係の検討 (3) 環境資源の開発と積極的活用 (4) 学びの協同性育成のための取り組みの実施 (5) 教育課程開発を支援する取り組み (6) 評価法の開発 (7) 定期的な三校園合同研究会による研究遂行のモニタリング、分析評価
<p>第二年次</p>	<p>第一年次の研究を、成果の評価に照らして修正や拡充を加え、本格化させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> (1) 新領域カリキュラム編成の本格的実施 (2) 各教科、総合的学習の時間、幼稚園5領域との有機的相互関係の再構築 (3) 環境資源の開発と積極的活用事例の蓄積と改善 (4) 学びの協同性育成のための取り組みの本格的実施 (5) 教育課程開発を支援する取り組みの充実 (6) 評価法の更新 (7) 定期的な三校園合同研究会による研究遂行のモニタリング、分析評価、
<p>第三年次</p>	<p>上記研究計画(1)から(7)につき、第二年次を引き継ぎつつ、より進展された研究開発の確立と評価に向けた作業を行う。</p> <p>研究開発の評価と成果発表のための公開研究会を行う。</p> <p>他校での実施に向けた検討・評価、実践事例の公表、提言を行う。</p>

(2) 評価計画

<p>第一年次</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○年度当初に、各種の評価法による多角的な実態調査を行い、研究成果を評価するための基準を設定する。 ○実践事例を集積し、三校園合同研究会等を開催し、実践事例の分析、検討、評価を行う。 ○合同公開研究会を実施し、第一年次の研究成果を公表し評価を得る。 ○年度末に「達成過程に現れる研究成果の評価」「応答性・潜在性に現れる研究成果の評価」のための長期時系列記録・追跡記録の分析を行い、1年間の研究成果の評価を行う。
<p>第二年次</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○年度当初に、各種の評価法による多角的な調査を行い、第一年次の研究成果を評価する。 ○長期時系列記録・追跡記録を行う。(中等教育学校入学後の接続生徒の自由研究テーマや興味関心の追跡調査を行う。) ○実践事例を集積し、三校園合同研究会等を開催し、実践事例の分析、検討、評価を行う。 ○合同公開研究会を実施し、第二年次までの研究成果を公表し評価を得る。 ○年度末に、長期時系列記録・追跡記録の分析、第二年次と2年間の研究成果の評価を行う。
<p>第三年次</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○年度当初に、各種の評価法による多角的な調査を行い、2年間の研究成果を評価する。 ○長期時系列記録・追跡記録を行う。 ○三校園合同研究会等を開催し、実践事例の分析、検討、評価を行う。 ○三校園合同公開研究会を実施し、三年間の研究成果を公表し評価を得る。 ○年度末に、長期時系列記録・追跡記録の分析、第三年次を加えた3年間の研究成果の評価を行う。 ○3年間の「能力に現れる研究成果の評価」「達成過程に現れる研究成果の評価」「応答性・潜在性に現れる研究成果の評価」に基づいて「適時性に現れる研究成果の評価」を行う。 ○3年間の総括的評価を行う。

5. 研究組織

(1) 研究組織の概要

